

Title	知足の説
Author(s)	小沼, 量平
Citation	懐徳. 1930, 8, p. 69-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88814
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

し人格の崇高なるを證して餘りあると謂はざるべからず。

終りに臨んで余の所編を綜括的に發表せんが爲めに、平素崇拜せる小野湖山翁の長詩を朗吟せん、唯憾むらくは、義公と湖山翁の時を同うして生れて其議論を上下せられざるを、

讀楠氏記有感偶作長句

小野湖山

南枝之蔭何繁盛。五十餘年護帝座。豈唯勳業冠中古。其人優爲王者佐。況復子姪臣從皆忠貞。求諸前古寡匹亞。人言正儀叛降穢其宗。我言此公處置出至忠。乃父乃兄相繼死。公而亦死誰折衝。三事料敵勢。一戰鼓兵氣。獨力足收京。幾回走賊帥。風雲變化數出奇。大廈寸木能自支。乃父遺命公敢忘。乃父兵法公深知。一進一退亦何常。舍垢包羞眞男兒。史乘多成賊臣手。後人誰知公心悲。君不見南北議和統則更立禮則父子。此公當日不死之功至此顯然耳。嗚呼此公當日不死之功至此顯然耳。豈有河內公之子帶刀公之弟而爲叛降之士。

知 足 の 説

小 沼 量 平

曾文正公曰、知_レ足天地寬、貪_レ得宇宙隘と、故に古來聖賢君子と崇敬せらるるもの、皆足ることを知り止まることを知る、帝堯富んで驕らず貴うして舒らず、許由の賢なるを知りて天下を許由に譲らんとす、是れ止まることを知るにあらずや、許由貧賤に安んじ辭して受けず、曰く「鷦鷯巢_ニ於深林。不_レ過_ニ一_枝。偃鼠飲_レ河。不_レ過_ニ滿腹。」と是れ亦足ることを知るにあらずや、唐の張蘊古、太宗文武皇帝に大寶箴を獻じて云ふ有

り、壯ニ九重於内。所レ居不過レ容レ膝。彼昏不レ知。瑤ニ其臺ニ而瑤ニ其室。羅ニ八珍於前。所レ食不レ過レ適レ口。惟狂罔レ念。丘ニ其糟ニ而池ニ其酒。と、上其の言を嘉せり、此の箴許由の言と事を殊にして指を同じうするもの知言と謂ふべし、孔夫子曰、富與貴。是人之所レ欲也。不レ以ニ其道。得レ之不レ處也。と、然るに今や時俗の通病と云ふべきか、上下共に其の道を以てせざる、不義の富貴を欲求して手段方法を擇ばず、自己の位地を利用して一意貪欲を逞うせんとし、大臣大將にして賄賂を收受する者あり、巨商富豪にして密輸出入を企て脱税を謀る者あり、議員たらんが爲に投票を買収して法に觸るる者あり、大會社の重役にして背任横領の罪を犯す者あり、其他小にしては詐欺騙取強窃盜等枚擧に遑あらず、教化の陵夷紀綱の頽廢此の時より甚きはあらず、思ふに是れ足ることを知らざるの致す所、予は茲に聖賢君子知足の教訓と其の行實を列擧して、貪慾飽くなきの人に鑑みる所あらしめんとす、老子三十三章に「知足者富」四十四章に「知足不レ辱。知止不レ殆」四十六章に「罪莫レ大ニ於可欲。禍莫レ大ニ於不レ知レ足。咎莫レ大ニ於欲レ得。故知レ足之足常足。」と、バイブル、ライモ、フイ聖書、提摩斐前書に「敬虔知レ足。利莫レ大。我出レ世無レ所ニ攜來。」イブ逝レ世亦無レ所ニ攜去。衣食足。宜レ知レ止。」と、また釋氏の法華經、普賢勸發品に「少欲知足。能修レ普賢之行。」と云ひ、維摩經、菩薩行品に「行ニ少欲知足。而不レ捨ニ世法。」と云ふ、聖賢の教ゆる所夫れ斯の如し、若し足ることを知らざれば、千匱の財寶を積み、萬鍾の米粟を藏するも其の心底貧者に異ならず、足ることを知る時は、一簞の食一瓢の飲陋巷に在りとも、其の樂を改めず、更に賢哲の出處進退を見るに、右大臣從二位兼中衛大將勳二等吉備眞備の骸骨を乞ふや、其の上啓の畧に曰く「伏乞致レ事。以避ニ賢路。上戴ニ聖朝養レ老之德。下遂ニ庸愚知足之心。特望ニ殊恩。祈ニ於矜濟。云云。」詔曰。「昨省ニ來表。即知ニ告歸。聖恩未レ周。懸車何早。悲驚交結。卒無ニ答言。通夜思勞。坐而達旦。不レ依レ所請。似レ逆ニ謙光。欲レ遂ニ來情。彌思ニ賢佐。云云。」また大納言從二位文室眞人大

市の骸骨を乞ふや、其の上表の畧に曰く「臣以愚質。幸遇聖明。……貪榮負貴。……伏願避路俊父。賜老丘園。止足以送餘年。云云」。詔曰「卿年及懸車。告老言退。知足知止。合於古誼。思欲抑留。恐非優老之道。云云」と、眞備大市二老臣に對する 聖寵の優渥なる 恩詔感激に勝へざるなり、是れ二老臣知足の徳の賚錫と謂ふ可きか、また前漢の疏廣の傳を覽るに「疏廣宣帝時。爲太子太傅。兄子愛爲少傅。太子每朝。因進見。太傅在。前。少傅在。後。叔姪並爲師傅。朝廷以爲榮。後廣謂受曰。吾聞知足不辱。知止不殆。功遂身退。天之道也。豈如下歸老故鄉。以壽命終。叔姪遂乞骸骨。許之。上賜黃金二十斤。太子贈五十斤。公卿大夫。故人邑子。設祖道。供張東都門外。送者車數百兩。既歸鄉里。日具酒食。請族人故舊賓客。相與娛樂。輒賣金以供具。或勸買田宅。廣曰。吾願自有舊田廬。令子孫勤力其中。足以供衣食。此金聖主所以惠養老臣也。故樂與鄉黨宗族。共饗其賜。以盡吾餘日。族人悅服。皆以壽終。」何ぞ其の心裏の高潔なるや、また明の馮公啓は知足歌六首を詠じて、足ることを知らざる者に訓諭するあり、文徵明は知福歌を作りて、「看上雖不如。比下當知足」と誨るあり、予は茲に唐伯虎の不如歌を掲げて、予の知足説を結了せんとす、曰く「我不如人。我無他福。人不如我。我當知足。知足不辱。一飯兩粥。謝天謝地。平安是福。」と頃者時病に感ずる所あり、此の説を作る、

(昭和五年五月五日)

追記

昭和五年五月二十三日、堂友太田勘兵衛氏を介し、永田文學士より先君子磐舟永田翁傳を寄贈せらる、依て直ちに繙閱せしに、巻頭に磐舟先生自筆寫眞版の座右銘を掲載しあり、曰く「貪榮萬乘猶無足。退步一瓢還有餘。」と是れは賣茶翁の偈にして先生は之れを自書して座右の銘とせられしと云ふ、宜べなり先

生は利慾の念に虚しく、常に後輩を戒めて富を作るは宜しく大道濶歩的なるべし、予は南岳先生の「行不由徑」の論語の御講義を拜聴せし以來常に之を服膺せり、また人は成功と同時に相當の善行を爲すは人生の必要條件なりと云はれたり、我懷德堂の重建及維持發展に關しては、先生は理事長として數萬圓の私財を投じ、更に漢學獎勵資金として金五萬圓を寄附せられたるは、懷德堂を知る者の普く知る所にして、先生平生の持論を實行せられしものと謂ふべし、先生の詩に「一醉一吟獨倚欄。動中靜境有餘歡。風塵牛馬任人笑。知分老來心自寬。」と先生知分知足の心境實に光風霽月の如し、茲に知足説に追記して、先生の座右銘を堂友諸彦に披露すと云爾

山 國 紀 行

小 沼 量 平

昭和五年六月八日、皇陵巡拜の爲め丹波國山國村に向ふ、大阪皇陵巡拜會創立者小林利昌翁外一行七十餘名、午前八時京阪電車急行にて天滿橋を發し、同九時京都三條停留所着、直ちに六人乗自動車十三輛に分乘して、先づ京都府葛野郡花園村に至り、第五十八代光孝天皇後田邑陵に禮拜す、更に徒歩十數町にして太秦村に至り、第五十五代文德天皇田邑陵

に禮拜し、夫れより花園村に出て埃たせ置きたる自動車に乗り梅畑に出づ、梅畑八幡宮は和氣清麿が宇佐八幡を勸請せしものなりと云ふ、車上より遙拜して過ぐ、此邊より農家の婦女子が、張板や梯子等の家具を二三品づゝ頭上に戴きて、販賣の爲め京都市に往く者を多數見受けたり、動容服裝などは矢張大原女の如し、是れより清瀧川に沿ふて周山街道を進